

論文審査の要旨および担当者

報告番号	甲 第 号	氏 名	小林 茂
論文審査担当者：			
	主査	慶應義塾大学教授 博士（政策・メディア）	稲蔭正彦
	副査	慶應義塾大学教授 博士（工学）	稲見昌彦
	副査	慶應義塾大学教授 経営学修士（MBA）	岸博幸
	副査	京都大学総合博物館准教授 博士（工学）	塩瀬隆之
<p>（論文審査の要旨）</p> <p>小林茂君の博士学位請求論文は「Local Government Initiated Cross-Industry Innovation 地方自治体が始動する異業種イノベーション」と題した和文で執筆されたもので、全部で6つの章から構成されている。本論文は、異業種の人材が協働することによってイノベーションを創出することを目指し、アイデア創出からビジネス化までの一連のプロセスをパイプラインとして提案し、「岐阜イノベーションプロジェクト」において提案したパイプラインを導入した実践的な研究活動を取りまとめたものである。</p> <p>本研究では次の点で特筆すべき内容を持っている。</p> <p>まず、イノベーションを創出することを目指したプロセスをパイプラインという形でデザインしている点が第1の貢献である。本論文で提案しているパイプラインでは、地方自治体が予算を確保して編成したファシリテーター・チームを編成する。本パイプラインにおいてファシリテーター・チームは、重要な役割を複数担っている。まず、地場産業と情報産業の様々な企業に対して説明会を開催し、参加を呼びかける。次に、多様な異業種を組み合わせでチーム編成を行い、メンタリングを行う。提案しているパイプラインのプロセスは、Stage-Gateシステムを簡略化して2つのステージで構成している。第1ステージでは、多様なスキルや視点、経験を持つ異業種のチームメンバーがデザイン思考を用いてコラボレーションしながら観察とブレインストーミング、プロトタイピングを繰り返す。第2ステージは、顧客を想定するところからクラウドファンディングに挑戦するところまでを行うステージである。</p> <p>第2の特徴は、提案したパイプラインを実践するため「岐阜イノベーションプロジェクト」を実施した点である。「岐阜イノベーションプロジェクト」は、イノベーションマネジメント、デザインプロセス、デジタルファブリケーションの3領域の知見を融合し、統合されたパイプラインとしてデザインしたことが特徴である。特に注目すべきは、「岐阜イノベーションプロジェクト」から「光樹」と名付けられた樹が発案されパイプラインのプロセスにしたがって進行して第2ステージまで進行したことである。「光樹」は、LEDの光による演出で日本酒を飲む経験を豊かにするという新しい価値を提案する樹であるが、第2ステージにおいてコンセプトプロトタイプを様々な展示会に展示して顧客を想定しつつ量産型をデザインし、クラウドファンディングを活用して資金調達とプロモーションを行って実際に顧客に届けることに挑戦している。「岐阜イノベーションプロジェクト」では、パイプラインの有用性を実践的に確認した。</p> <p>本研究では、地方自治体、製造業と情報産業から人々を集め、デザイン思考を用いてコンセプトを創出し、デジタルファブリケーションを活用してコンセプトプロトタイプをつくり、クラウドファンディングによって資金を調達して実際に購入してくれた顧客に製品を届けるという一連のプロセスを統合されたパイプラインとしてデザインし、「岐阜イノベーションプロジェクト」として実施した。本研究は、イノベーションマネジメント、デザインプロセス、デジタルファブリケーションという3つの研究領域に貢献する。以上、審査の結果、本論文は博士（メディアデザイン学）の学位論文として十分な価値を有するものと認める。</p> <p>審査経過</p> <p>2012年7月27日 予備口頭試問審査会が開催され、2012年8月23日に審査の結果合格した。予備口頭試問審査委員：奥出 直人君、稲蔭 正彦君、稲見 昌彦君</p> <p>2015年7月14日、16:30-18:00 博士論文公聴会が協生館 C3S01 教室にて開催された。同公聴会終了後、同教室で博士論文審査会が開催され、全会一致で合格を決した。なお、公聴会出席者は以下の通りであった：</p> <p>博士論文審査委員 4名</p> <p>来場者 約15名</p>			